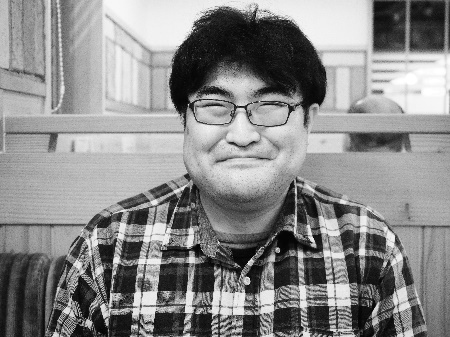
東日本大震災とその後の子どもたちを

支えている人たちインタビュー

第２回（前編）

**◎支えている人／話し手：三浦忠士さん**

認定NPO法人 冒険あそび場-せんだい・みやぎネットワークに所属するプレーリーダー。仙台市の海岸公園冒険広場と子育てふれあいプラザ のびすく若林で、こどものあそび場づくりに取り組んでいる。

**◎海岸公園冒険広場**

仙台市若林区にある仙台市の都市公園。認定NPO法人 冒険あそび場-せんだい・みやぎネットワークと株式会社東北緑化が共同企業体を構成し、指定管理者として管理運営している。一律の禁止事項を設けず、一人ひとりがやりたいことを見つけ、自由に遊べる手作りのあそび場「冒険遊び場」が常設されている。「やってみたい！」を実現するためのあそび素材（道具・工具・材料など）を自由に使うことができる。大型遊具や幼児遊具のある広場やデイキャンプ場、太平洋を一望できる展望台も併設され、こどもも大人も楽しめる公園となっている。東日本大震災によって被災し休園を余儀なくされたが、2018年度に再開。津波発生時の一時避難場所である「避難の丘」としての役割や、震災のことを後世に伝える役割も新たに担っている。

・海岸公園冒険広場のホームページ：https://bouken-asobiba-net.com/bouhiro/

・活動報告：[2011年度](http://www.bouken-asobiba-net.com/wp/wp-content/uploads/2016/11/bouhirodayori.pdf)・[2012年度](http://www.bouken-asobiba-net.com/wp/wp-content/uploads/2016/11/asobibadayori2012.pdf)・[2013年度](http://www.bouken-asobiba-net.com/wp/wp-content/uploads/2016/11/asobibadayori2013.pdf)・[2014年度](http://www.bouken-asobiba-net.com/wp/wp-content/uploads/2016/11/asobibadayori2014.pdf)・[2015年度](http://www.bouken-asobiba-net.com/wp/wp-content/uploads/2016/11/boukenasobiadayori2015.pdf)・[2016年度](http://www.bouken-asobiba-net.com/wp/wp-content/uploads/2017/09/0daefab6054739a1c3c88447e4cf8b26.pdf)・[2017年度](http://www.bouken-asobiba-net.com/wp/wp-content/uploads/2019/08/afba024b02b372b530869b1ec259e1a0.pdf)・[2018年度](http://www.bouken-asobiba-net.com/wp/wp-content/uploads/2019/08/252f339c22c314796f2adb5228a0d154.pdf)・[2019年度](http://www.bouken-asobiba-net.com/wp/wp-content/uploads/2021/05/fd0270379aeecc16b712c54bd599a40b.pdf)

**仙台沿岸部にある海岸公園冒険広場**

仙台の街は、中心となる郊外の街が海から離れた内陸にあります。東京や横浜、大阪など、大半の大都市って海の近くに都市が形成されていることが多いかなと思いますが、仙台はちょっと特殊で、沿岸部が農業や自然が豊かな環境で、山の手の方が都市化しています。そのため、沿岸部のこどもたちは、震災前は仙台の中心部よりも非常に自然豊かな環境のなかで暮らしていました。海、田園地帯、そしてこれは仙台の沿岸部の特徴ですが、海岸林がずーっと広がっていたこと。場所によりますが、幅がだいたい200メートルくらい、明治～大正期にかけて主に田畑の防風のため松が植林されたという経緯があるんですが、やがて時間の経過とともに松だけじゃなく多様な植物が育ち、地元の方々に言わせると「ヤマ」と呼ぶくらいの鬱蒼とした森が広がっていました。きのこも生えているしリスもいるし野鳥も動物もいて、沿岸部なのに森が深いなんていう環境でした。海に森に砂浜に…非常に多様性に富んだあそび環境が広がっていて、その中に冒険広場もありました。

冒険広場は、震災前は近くに住むこどもたちが歩いてあそびに来られるような場所でした。その子たちは自然豊かなあそび環境を享受しながら、冒険広場に来るとのこぎりもかなづちも使えるし、望むなら秘密基地のような小屋も作れる。常連と呼ばれている毎日通ってくるような子は、貞山掘という日本一長い運河に釣りをしに行って、釣った魚を持って帰ってきて、焼いて食べるということもしていました。豊かな環境で、よりあそびを深めるというような役割を冒険広場が果たしていた、というのが震災前の冒険広場とその周辺のあそび環境の特徴的な部分かなと思います。

**地震が起きて**

そこへ津波が来て、こどもたちの住まいがなくなり、当然家族を亡くした子もいました。海岸林も流されました。そんな状況の中で、まず住まいを失ったことで移転を余儀なくされました。被災したことによって、最初は緊急避難的に避難所に移り住んで。その後に近くに仮設住宅ができて。2015年くらいになると復興公営住宅という市営の恒久住宅ができて。豊かなあそび環境からこどもたちが引き離され、慣れない環境で遊ばざるを得なかったということと、（移転先で）元々住んでいたこどもたちのとの新しいコミュニティを構築しなければいけない、といういろんなことがいっぺんに起こっていたという状況でした。それが震災後の大きな変化としてあります。

**巡回型あそび場**

東日本大震災で被災した冒険広場は休園を余儀なくされました。冒険広場を運営・管理していた私の所属団体でもある認定NPO法人 冒険あそび場-せんだい・みやぎネットワーク（以下「冒険あそび場ネット」と記載）は、被災して移転したこどもたちの住まいの近くを選び、あそび道具をたくさん積んでいる「プレーカー」と呼ばれる車で巡回して、仮設のあそび場を定期的に開催するという試みを始めました。仮設住宅、そのそばにある公園、小学校の校庭、室内あそび場…様々な環境で場作りをしました。何よりこどもたちが自分の足で来られることを大事にしました。僕たちの足の及ぶ限り、話のつけられる相談相手がいる限り、できるだけ様々な場所に顔を出して、そこに住んでいるこどもたちが自分の足で行ける場所、気が向いたときに行ける場所を大事にしていて、そういう場所をどんどん開拓していきました。

狭い仮設住宅で、大人たちも心が痛んでいて、大人たちに気を遣いながら狭い環境で生活しなくてはいけなかったこどもたちを想像してもらいたいです。右も左もわからない、慣れていない環境の中でこどもたちはかなり大人びて、笑顔を見せるし元気ではあるのですが…。当時、小学校の校庭を借りるにあたって相談にのってもらった校長先生の言葉を借りると、以前のようにギラギラとした目をしていないと。その言葉がすごく印象に残っています。悪さをしないというか、雰囲気として、自分で自分のしたいことを我慢するような感じがありました。こどもたちのそういう状況を目の当たりにして、外あそびの環境があると、こどもたちが自分らしく生きられてギラギラしてものが出せて生きやすくなるんじゃないかと考え、仮設住宅でのあそび場を始めました。外あそび＝こどもたちが自分らしくいられる環境として外が適している、ということが僕らの認識ですが、実際こどもたちのギラギラみたいなものは、やるごとにどんどん引き出されていったんじゃないかなと思います。

事例１：仮設住宅で

例えば、ある仮設住宅は元々サッカー場があったグラウンドに建てられて、クラブハウスだったところが集会所みたいな扱いだったんです。その集会所の前で開催したあそび場がありました。環境としては大勢であそぶには狭い場所だけど、大人の気を遣わなくていい、自分の思いついたことにできる限り応えてくれる大人がいる、そういうことでだいぶギラギラした感じが戻ってきたかなと思います。私たち大人が思っているより、こどもたちはすごく気を遣うんですよね。お父さんお母さんのこともおじいちゃんおばあちゃんのことも大好きだから気を遣うんですよ。言いたいことも言わないし、泣きたくても泣けないし、もちろん笑いだって極端な笑いができないというか。仮設住宅は壁が薄いから大声も出せないし。いろんな意味で気を遣って自分らしさを出せない生き方をしていました。しかし、あそび場は狭くて自然もなくてという場所だけど、外にいるというだけで、ちょっとお父さんお母さんから距離がとれるというだけで、ギラギラが取り戻されていくような状況を目の当たりにしたのは覚えています。特に印象的だったのは、被災して大きな喪失を経験したこどもがいたんですが、その子がつねるんですよ。攻撃的というわけじゃなくて、あそびの延長でにこにこしながらやるんですけど、ずーっとつねる子がいたんです。やめろ！みたいに怒鳴りはしないですが、痛い、いやだということは伝えながら対応していて。あそびを介して継続的に関わって、一年過ぎたくらいかな、つねらなくなって。その代わり、自分が主人公になって悪者を退治する漫画を描き始めて。そっちで消化されていって攻撃がなくなっていったのかな、と思っています。行き場のない喪失感みたいなものを消化する術をあそびの中で探していて、自分の仲良くしているやつを苦しめないで、でも自分の気持ちを吐き出す方法を見出したのかな、という見立てを僕はしています。自然豊かな環境ではない、沿岸部の状況を再現できるわけじゃないけれど、自分の気持ちを自分自身で我慢しているところが多分にある住環境の中で、少しだけでも自分らしく生きられるような場を作ろうということで、始まった巡回型あそび場。やってよかったと感じている事例のひとつです。

事例２：仮設住宅の隣の公園で

例えば、ある仮設住宅に住んでいた子の話です。そこは公園の中に仮設住宅が設置されてたこともあって、植栽が多くあり、一般的な自然という意味では豊かなところで、四季折々で様子が変わりますし、非常によろしい場所でした。そこでその子もずいぶん変わったかなと思います。その子は、ほかの子が笑顔であそんでいると、怒る子だったんです。うるさい！って。仮設住宅の中で、もしかしたら親御さんに正しいと教えられたことを、そこの子たちに行うということだったのかもしれない。そこも含めて僕たちは否定するというスタンスはとらないので、まぁまぁと言いながら、その子の想いを聞くというような対応をしていました。その子がどんなあそびを望んでいるのかちょっとずつ聞き出しながら、可能な限り実現するような形で関わっていった結果、ずいぶんなくなりましたね。その子自身のこどもらしさというか、したいことを気にせずにやるみたいな部分をずいぶん引き出してきたかなと思います。徐々に自然な笑顔を浮かべながらあそぶようになったかな。ままごとあそびとかしながら。本来は好きだったんだろうけど、最初は素直に表現できないような感じでしたね。

事例３：復興公営住宅で

そんな中で時が進んで、2014年の11月くらいに復興公営住宅が建ち始めて、市営の恒久住宅ですね。仮設の住まいから、本格的に長いこと住む住まいへ。ここで起こったことは、せっかく仮設住宅で新しく構築されたコミュニティ、顔の見えるご近所のおじちゃんおばちゃん、仲良くした友達ができ始めた矢先だったのに、ここに引っ越したらまた作り直さなければならなくなった、ということです。これを受けて、仙台市若林区の荒井東復興住宅でも巡回型のあそび場を行いました。石巻のNPO法人にじいろクレヨンと提携して、仙台市宮城野区田子西の復興公営住宅にも出入りしました。せっかく作り上げたコミュニティの再構築の課題がどこにでもあって、それにこどものあそび場づくりを通して取り組みました。地域のお祭りを応援したり、大人向けのものづくりの交流サロンみたいなものを開催したり。大人のコミュニティづくりも参与しながら、同時にこどものあそびを介したコミュニティ作りにも参与して、それをうまくミックスしていけたらいいなと。でもやっぱり大変でしたね。復興公営住宅は、もともと一緒に住んでいた人たちだけじゃなくて、仙台市内全域から人が来るんですよ。その中で仲良くなれる人たちもいれば、そうじゃない人たちもいる。こどもたちは一緒にあそんでいるうちに仲良くなっちゃうんですけど、大人の場合そうはいかないこともある。こどもたちに対してのあそび場としては成功したのかなと思うんですけど、大人たちにいろいろ気を遣いながら開催せざるを得ませんでした。まぁその中でも週に一回でも通ってくるよそ者が、ものづくりサロンも開催しながら大人たちと関係性をつくりつつ、あそびの場を提供して。そんな僕たちの活動が少しでも人と人をつなぐ機会をつくったと願いたいところです。特にこの時期、被災者への生活の支援が徐々に縮小していって、自分で稼ぎださなくてはいけないと追い込まれる保護者も現れてきたのが印象に残っています。そういう部分での大人の辛さは僕たちが聞いたりして。複数人数で現場に行っていたので、大人たちの思いを聞くスタッフと、こどもたちとあそぶスタッフと、そういう対応をとったような時期もありました。仮設住宅の時はよくも悪くも気が張っていて、乗り切ろうとか仲良くしようというテンションがもちろん大人たちにもありましたが、実際生活の中で向き合う様々な課題に立ち向かうことが長期化するこの時期になると、大人たちの疲弊が目立つなかで、それをケアしながら、こどものあそび環境を作っていたというようなことが求められた時期じゃないかなと思います。ここは自然環境が豊かとはいえないですが、オープンスペース、つまりいつ来ていつ帰ってもOKということです。様々な大人たちとの関係性の中でいろいろ疲れたり我慢することがあったりしながらも、そのすきまをぬってこどもが来たい時に来れる場所。複雑な他者との関係性とか住環境とかに、震災直後とは違った形で我慢を強いられる中で、それでも自分のタイミングで来れるという場所のこどもたちにとっての価値は、あったのではないかという気がしています。

事例４：現地再建した地域で

被災した方が、移転せずに震災前から暮らしていた現地で生活を再建した地域でも活動もしてきました。具体的には、岩沼市にある「楽農村であそぼう」というものです。元々岩沼市では、震災直後は仮設住宅のそばの公園でのあそび場、「里の杜あそび場」というところを活動していたのですが、そこで出会った沿岸部で農業を営んでいる方が貸農園も営んでいて、借り手がいなくて空いている農地があるから、そこであそび場をしたらいいんじゃないかということを提案していただいて、始まりました。ここは岩沼でも農地のどまんなかで、かつ私有地なので、ちいさいことを言う人もいない、地主さんもどんどんやれと言ってくださって、のびのびできましたね。岩沼の親子があそびに来ることを想定して始めたあそび場でしたが、仙台の活動の中で出会った親子たちもあそびに来るという場所になりました。2か月に1回くらいのペースでやっていたんですけど、あそびに目覚めた親子たちが活動をやっていない日にもあそびに来たり、農園なんかも借りちゃったりして。巨大な穴を掘って水を溜めたり、そのとなりに山をつくって飛び込むあそびができたり。そんなあそびもできるし、カエルも捕まえ放題でのびのびやっていました。今までお伝えしてきたような巡回型あそび場ですらも見えなかったこどもらしさがダイナミックに表現されているような場所で、僕らもそれを垣間見たような場所でした。

こどもの変化ももちろんありましたが、印象的だったのは大人の変化です。こどもの面倒をお父さんがみてくれないと漏らす、お母さんがいたんですね。そんなお父さんが、楽農村に来たことをきっかけにこどもとあそび始めたんです。彼は火を焚くのにはまって、たき火の番をしてくれるようになったんです。そのうちに肉やら畑で採れた野菜なんか焼きにくるこどもの人気者になっちゃって。そうなるとお父さんも悪い気しないですよね。毎回来るのが楽しくなったみたいで、そうなるとお母さんの笑顔も増えて。私たち支援者は当然こどもと関わるのですが、それはあくまで一時的なもので、毎日こどもと生活するのは親なんですよね。本当にこどものあそび環境を整えたいと願うならば、まずは親御さんに変わっていただいた方がよいこともあるのかなと思っていて、こどもだけじゃなく、お父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃんとの関係も大事にしているし、だからこそ交流サロンもやってきました。そんな中でこのお父さんの変化というのは印象に残っていて、外の自由な環境で大人も自分らしくなれる。そうすると、こどもに対しての許す部分、大目にみる部分、受け止められるキャパシティも広がっていくから、よりこどものあそび場が豊かになって、よい循環がうまれていくんじゃないかなと。そんなことをすごく感じたあそび場でした。このあそび場は開催時間だけに閉じられたものじゃなくて、日々の生活の中でのこどもの生きやすさみたいなものを作り出すことになったんじゃないかなと感じています。

後編に続く